

二葉亭四迷『浮雲』からみた建築空間
— 明治文学黎明期の特質 —

正会員 ○ 渋谷桂克*
同 近藤正一**
同 国保 潤***
同 若山 滋****

【序論】 建築には、実用的な機能と物理的形態の問題だけではなく、人間の精神に与えるある種の文化的「意味」が内在している。本研究は、建築の創り出す場の有機的な質を評価するために、空間という無形の存在を文字という物理的ツールによって表現した文学作品を取り上げ、それぞれの時代における建築空間の「文化的系」を探っていこうとするものである。もちろん文学作品とは、作者というその時代を生きた一人の人間の世界観であるが、その作品がその時代において広く人口に膾炙していたことを考慮すれば、その作品世界は、その時代の社会に存在していた共有感覚に対して、作者と読者のコミュニケーションの双方向的な行為が成立していたと言うことが出来る。つまり、文学の作品世界を探っていく事は、その時代の空間意識の一側面を明らかにしていく上で、有力な手段と言えるのである。その上で今回は、明治の西洋文化導入期における空間意識に注目し、それが、建築空間に対してどういう「意味」を与えたかを明らかにする。

【研究対象】 明治黎明期における近代文学の行方は、明治20年に刊行された二葉亭四迷の『浮雲』における言文一致の自由な表現の創始によって指し示された。二葉亭四迷は、その前年に発表した『小説総論』の中における「真相を仮りて虚相を写し出す」のが写実だという方法意識によって『浮雲』を実作化し、近代的自我に目覚めた青年が、旧来の封建的な体制の中で苦悩する姿を描き出した。明治時代において完全に他者であった西洋が、自己の一部として獲得するまでの矛盾と葛藤は、その写実的な空間描写にも強く現れている。テキストとしては、旧字体の校訂以外は、より原文に則した岩波書店のものを使用している。

【研究の方法】 本研究では、二葉亭四迷の近代リアリズムによる空間的「意味」を表出するために、以下の3つのアプローチを試みる。1) 文学というものを文字の集積と捉えた場合、その言葉一つ一つは文章の中の「点」

となる。その「点」の中でも建築に関する用語を建築用語と定義して、それを11のカテゴリーによって抽出・分類し、その頻度と傾向について考察する。2) 言葉・文章というのは、頭から読んでいかない限り意味が通じない以上、時間軸という「線」の上に秩序づけられた思考である。ここでは、物語空間の線形的な要素として舞台空間の推移に着目し、その推移と各舞台の叙述量(文字数)を意識時間として考察する。ただし、登場人物の回想や空想の表現や、舞台が不明瞭で舞台設定が正確に出来ない表現は、全て「回想」に分類した。3) 物語そのものは線形的な思考であり、読書行為によって作品世界の全体像に一步一步近づいていくのであるが、最終的な全体像は、把握された各部分の関係として非時間的に形成されるのである。これは、作品全体の「面」としての認識であり、その「面」を構成する要素として建築もしくは空間意識に関する表現を建築表現として抜き出し、それによって作品全体としての空間的「意味」の構造を見ていく。

【建築用語の頻度と傾向】 図1から、最も抽出頻度の多いのが「部屋」の31%で、続いて「建物」の21%となっており、「建物」「部屋」は、用語全体の52%を占めている。また表1から、「建物」においては、「家」「下

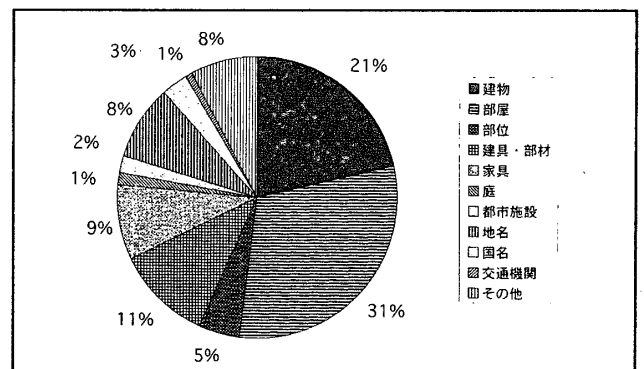


図1 建築用語の分類別構成比

表1 頻度の高い建築用語

建物	回数	機関	回数	部屋	回数	部位	回数	建具・部材	回数	家具	回数	庭	回数	都市施設	回数	地名	回数	国名	回数	交通機関	回数	その他	回数	
家	28	6	二階	36	壁	3	障子	20	ランプ	10	庭	3	まな板橋	2	団子坂	6	英国	6	車	6	4	家内	8	
下宿	11	9	部屋	22	軒	3	梯子段	12	机	9	中庭	1	腰掛け	2	番町	5	日本	5		6			7	
隣家	8	3	坐蒲	20	梯子段	2	格子戸	7	床	6	井戸	1	九段坂	1	東京	4	スコッチ	4		2			坂下	2
宿所	7	0	縁側	15	床	2	柱	4	火鉢	6	竹垣	1	路	1	静岡県	3	トルコ	3		1			六畳	2
業省	4	2	奥坐蒲	14	押入	2	木戸	3	火入れ	3	火入れ	2	釣瓶	1	動物園	1	ロンドン	2	フランス	1			此地	2
塾	3	3	子舎	7	丁字櫓干	1	襖	3	書函	2			石橋	1	横町	2							一軒	2

The Architectural Space in Ukigumo of Futabateisimei

SHIBUYA Yoshkasu, KONDO Shoichi, Kokubo Jyun, WAKAYAMA Shigeru

宿」「宅」など用語の大半が主舞台としての「園田家」を指すもので、【部屋】においても多く見られたのは、園田家における「二階」「部屋」「坐舖」「縁側」となっている。また、西洋文化導入期という視点からみると、舞台空間の「点」的要素である建築用語からは「洋」をイメージさせるものは少なく、【家具】に多少見られる程度となっている。

【舞台推移と意識時間】 図2より、物語空間の6割近くが「園田家」を舞台としており、3割近くが「回想」による表現で、作品全体として9割近くが「園田家」「回想」によって描かれている。また、図3において舞台空間は、「園田家」と「回想」を行き来するように推移しており、これは「園田家」におけるそれぞれの空間にプロットされた登場人物が、その空間の描写とそこでの自己の意識描写を繰り返すことによって物語が展開しているためである。その主舞台の「園田家」として描かれている舞台空間の意識時間による構成比は、図4のようになり、『浮雲』の主な舞台空間は、「坐舖」「二階」「お勢の小舎」とそれらをつなぐ「縁側」等の中間領域に大きく分類することが出来る。

【建築表現】『浮雲』の主要舞台である「坐舖」「二階」「お勢の小舎」そして「縁側」「梯子段」について、これらの特徴づける建築表現と「回想」における空間意識の表現からキーワードを抜き出し図4を作成した。「坐舖」は、家族が食事や会話の際に集まる中心的空間として、そこには「園田家」の主人である「お政」が中心的人物として存在している。それに対して、「お政」に「火鉢」をはさんで迎えられる他の登場人物達は訪問者としての

傾向を持ち、「文三」の「下坐舖で昼食」「二階の居間へ「戻り」という表現などから、「二階」「お勢の小舎」は家族生活という視点において周縁の空間であり個の空間であるといえる。一方、新時代的思想という視点から見ると、「二階」「お勢の小舎」とそこに存在する「文三」「お勢」が空間意識の中心であり、その他の空間は「坐舖」も含めて周縁の空間ということになる。そして、その二つの中心によるそれぞれの空間は、登場人物のプロットによって様々な重なり合いをみせ、それは物語において「新主義と時代遅れの旧主義の衝突」というかたちで、「坐舖」「縁側」等を舞台に描かれている。しかし、「お勢」の新主義は、新しいものに対する一時的な「かぶれ」であり、そのため独り新時代を背負った「文三」の「園田家」における孤立によって、「二階」空間の特質は、新主義と孤独性という明治黎明期の特質を浮き彫りにしている。そして、物語の展開の中で「二階」を中心にした新時代的思想は、「坐舖」から「お勢の小舎」そして「縁側」とその色を薄めていき、「二階」という閉ざされ圧迫された空間の中だけでその内圧を高めていくのである。

【結論】 本研究では、人間の意識が創り出す空間の領域とその重なりを見ていくことにより、作品における舞台空間の特質をみてきた。それは、建築が創り出す場の有機的な質を評価して行こうというものであり、『浮雲』においては、新主義から時代遅れの旧主義といった舞台空間が「二階」「縁側」「お勢の小舎」「坐舖」といった序列で対応している事が明らかになった。

参考文献：1) 若山滋、ほか3名：夏目漱石の前期の長編小説の舞台となる建築空間の意味、日本建築学会計画系論文集 No.478,1995年12月号 2) 若山滋、ほか1名：『万葉集』における建築空間、日本建築学会計画系論文集No.388,1988年6月 3) 若山滋：文学の中の都市と建築、1994年1月 4) 二葉亭四迷：浮雲,1837年-1839年

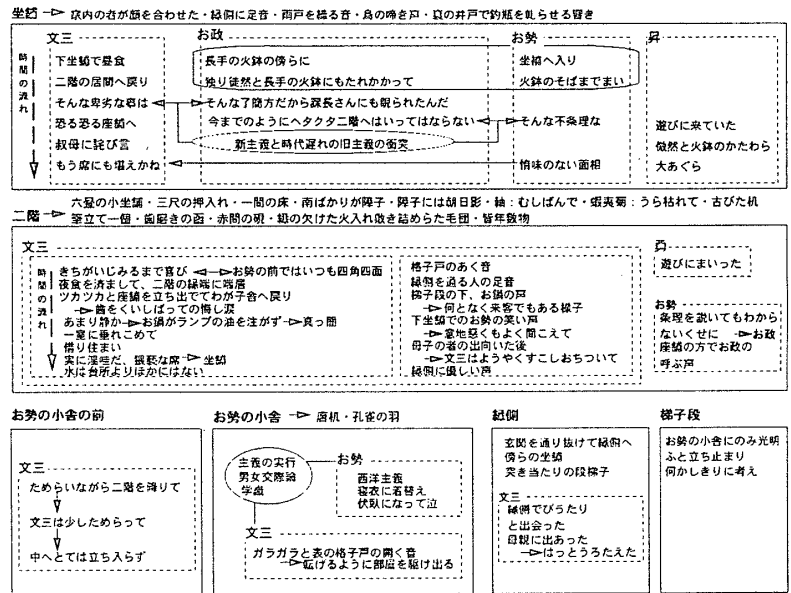
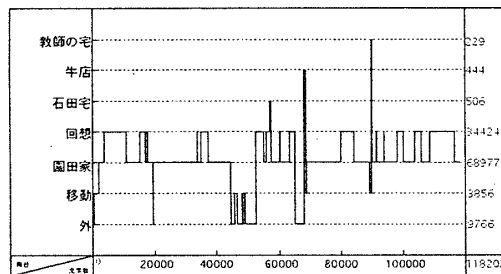
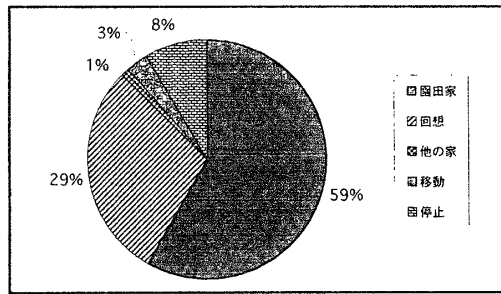


図3 舞台推移図

図4 舞台空間意識構造図

* 名古屋工業大学社会開発工学科 大学院生・工修
 ** 名古屋工業大学社会開発工学科 助手・工修
 *** 名古屋工業大学社会開発工学科 大学院生・工学
 **** 名古屋工業大学社会開発工学科 教授・工博

Graduate Student, Nagoya Inst. of Technology, M.Eng.
 Research Assoc., Nagoya Inst. of Technology, M.Eng.
 Graduate Student, Nagoya Inst. of Technology, B.Eng.,
 Prof., Nagoya Inst. of Technology, Dr.Eng.